上智大学経済学部　同窓会会報　エコノミアン
ECONOMYAN VOL. 56
◆発行日／平成31年4月10日　◆発行／経鷲会 千代田区紀尾井町7-1 上智ソフィア会内 ◆編集／広報委員会　編集長 戸川 清（1971経・経）
www.sophiakai.jp/blog/economyan/

続・経済学部の新たな取り組み

元 経済学部長　青木　研

エコノミアン Vol. 53 で経済学部の新たな取り組みを紹介しましたが、今号では「続」として前回からのアップデートを紹介しましょう。この号が発刊される頃は「元」学部長になっているはずですが、新たなチャレンジを続ける経済学部を、これからも変わらずご支援いただけたらと思います。

1）　英語による専門科目教育の強化

経済学科で英語特修プログラムが始まったことを紹介しましたが、今年度から経営学科でも「経済学部・経営学英語特修プログラム」が開設されました。英語で経済・ビジネスに関する内容を理解し、英語で経済・ビジネスに関する内容を伝えることのできる学生を育成するためのプログラムです。

Certificate Of Program Completion

Awarded to:

Sophia Economyan
Name

A1541XXX
Student ID

in acknowledgement of the successful completion of
"Faculty of Economics, Economics in English Program"

S
Grade

Dean　Ken Aoki

October 23rd, 2018
Date Issued

SOPHIA UNIVERSITY FACULTY OF ECONOMICS

Certificate No　2018006

写真１　英語特修プログラムの修了認定証

英語特修プログラムでは、多数の学科専門科目が英語で提供されており、修了要件（認定対象科目を 20 単位以上、対象科目の GPA 3.0 以上）を満たした学生には**写真１**のような修了認定証が授与されます。プログラムを開始して今年は初めての修了者を迎える年となりましたが、現時点で早くも６名の修了を認定することができました。経済・経営の専門科目を英語で学ぶ機会の提供を通じて、経済学部生の海外留学や卒業後のグローバルなキャリア形成を支援して行きます。

また、全学的な取り組みである SPSF（Sophia Program for Sustainable Futures）では、経済・経営学科ともに英語の授業科目のみで学位を取得できるコースの開設を進めています。2020 年の秋からはいよいよ経済学科で、2022 年の秋からは経営学科で SPSF を開始します。

2）　実践的な教育の実施

ビジネスの第一線で活躍する実務家を講師に招いた、課題解決型の講義を実施しています。一例として Vol. 53 でも紹介しましたが、今年も上智大学、香港中文大学と経団連による連携講座「Challenging Frontline Issues in Global　Business」が８月に開講されます。

昨年は香港中文大学の学生、本学経済学部の学生が、香港と四谷のキャンパスに１週間ずつ滞在し、ANA グループから提示された観光ビジネス上の課題を解決するため、両大学混合の３チームが英語でグループワークに取り組みました。

最終日には、経営学科の網倉久永教授がコーディネートする中、ANA グループの幹部を前に、各チームが新たなビジネスモデルを提案するプレゼンテーションを行いました。学問的な成果はもちろんですが、香港と日本という異なる言語、異なる文化的背景を持つものが協働で１つのプロジェクトを遂行できたことは、学生にとって貴重な経験となりました。**写真２**や東洋経済 ONLINE（https://toyokeizai.net/articles/-/236214）などで、連携講座の様子をご覧いただけます。

写真２　ANA の機体工場を見学

3） 社会科学研究を通した「人間の安全保障」への取り組み

2018年に経済学部の教員が中心となって、上智大学・人間の安全保障研究所（Sophia Institute for Human Security）を設立しました。2017年度採択文部科学省私立大学研究ブランディング事業「『人間の安全保障』実現に取り組む国際的研究拠点大学としてのブランド形成」を推進するにあたり、研究面の中核として機能する研究所です。
（URL http://dept.sophia.ac.jp/is/sihs/）

事業名にある「人間の安全保障」は、なじみの少ない概念かもしれません。安全保障と聞いて真っ先に思い浮かぶのは「国家の安全保障」でしょうか。国家の安全保障では、国家の安全を守ることに焦点を当て、そのことを通して間接的に国民の安全も守られます。これに対し、貧困、環境汚染、感染症、紛争など人々の安全を脅かす脅威から人々（人間）を守ることに直接焦点を当てようというのが人間の安全保障です。

古くは「人権」、新しいところではSDGs（持続可能な開発目標）なども同じ志を持った概念です。これら類似の概念と比べた人間の安全保障の特徴は、人々や社会の成長・発展にとって脅威となるダウンサイド・リスクに対処することに力点を置いている点でしょうか。

ダウンサイド・リスクに対処するための方策や制度を考える。まさに経済学が貢献できる分野です。この事業ではサブサハラ・アフリカや南アジア・東南アジアの開発途上国をフィールドに、社会科学的な学術研究を通して人間の安全保障の実現に取り組んでいきます。

また、本事業の中心は研究になりますが、四谷キャンパスにある他のセンターと連携することで、研究の成果を学部の教育や、キャリア形成にもつなげていくことを計画しています。将来、研究者になる学生や国際機関で活躍する人を育てて行きたいと考えています。

「再配達問題」にチャレンジ！

角井亮一（1991年 経・経）

■2017年宅配クライシス

2017年。ヤマトショックが、そして、宅配クライシスが起こりました。

ヤマトショックの当日、私はパームスプリングスに居たのですが、現地時間の夜9時くらいに、日本経済新聞社の記者の方から、国際電話があり、「解説お願いします」と、すでにワインをたらふく飲んでいた私に聞いてきたのを覚えています。

内容を聞いていると、2016年以降の他の情報も聞いていた角井には、事の真実がわかりました。労使で決めていた労働時間が守られていなかったから、無理が祟り、このようなことが起こったと。

■メディアでの解説

その後、ヤマトショックや宅配クライシスに関する解説を、TBS「ひるおび!」、フジテレビ「とくダネ!」「めざましテレビ」、日本テレビ「スッキリ!」、テレビ朝日「ワイドスクランブル」「グッド!モーニング」などの人気番組や、TBS、テレビ朝日、BS日テレ、BSジャパンなどのニュース番組や、NHKラジオ、TBSラジオ、J-WAVE、TOKYO FM、ベイエフエムのラジオ番組など、また、日経ビジネスほかの経済誌、日本経済新聞などの全国紙などあらゆるメディアで、こう解説しました。

“再配達がなくなれば、大幅な値上げをする必要はない。なぜなら、2014年より宅配運賃の値上げについて、各宅配会社に話をしていた身としては、多少の値上げは必要だが、再配達で発生している2600億円のムダがゼロになれば、今の宅配クライシスは解消する”

今もまだそうなのですが、宅配会社大手3社が手を組んで本気を出せば、再配達をゼロにすることは可能です。そういった解説をしました。

■物流業界人としての責任

私は、実家が光輝物流という物流会社ということもあり、当時の値上げについては恥ずかしい思いをしていました。なぜなら、物流は日本のインフラだからです。例えば、電気代が急に50%アップや5倍とかになることはありません。そんなことが起これば、国民は激怒するに違いありません。本来はもっと前に少しづつ値上げをしないといけないことを知りつつ、先延ばしにして、大幅値上げをしてしまった物流業界で育った身として、恥ずかしいと感じたのです。

■ 再配達ゼロをライフワークに

2014年に、宅配研究会を組織し、年間1億5千万個を出荷するグループになりました。ミッションは、「宅配会社と協力して、安定供給、安定価格を実現すること」です。喧々諤々の議論をした結果、いくつかのプロジェクトが走り、最終的には、ウケトルという再配達を減らすアプリを開発しました。

このアプリは、iPhoneやAndroid端末で使え、このアプリを入れて、Amazon、楽天、ヨドバシなどと連携するだけで、20%の不在配達を減らすことができます。これが、全宅配で実現すれば、2600億円の20%の520億円が削減できます。これは、アプリを入れて使うだけで実現するコスト削減です。

ぜひ、アプリを「ウケトル」と入れて、ダウンロードしてください。

しかし、私の目標は、宅配ドライバーさんが無駄足になっている再配達のコスト2600億円をゼロにすることです。これを実現するには、宅配大手3社が手を組むことが必要です。それをやってもらうには、中途半端な行動では、実現できないので、ライフワークとして取り組むことにしました。現在、29冊の物流書籍が、日米中韓台越で売られ、メディアや金融ファンドでも物流の解説をしている身ですが、そこまで性根を入れてやらないと実現できないと思っています。

■ 100億円の無駄削減へ！

現在、宅配研究会では、100億円の無駄を減らそうとしています。これだけの無駄は、中途半端では実現が難しいでしょうが、きちんと計画たてて、各宅配会社と腰を据えて協議実行していけば、十分に達成できると思います。

ぜひ、みなさんも、再配達問題解決アプリ「ウケトル」をインストールして、使ってみてください。

社会の無駄なコスト、しかも、宅配ドライバーさんという生身の人の無駄な労力を減らすため、みなさんのお力をお貸しください。

（経営コンサルタント、
株式会社イー・ロジット代表取締役）

四ツ谷から仙台へ、会計からアートへ

桑原清幸（1995年 経・経）

皆様、こんにちは。公認会計士の桑原と申します。私は上智大学を卒業してから、これまで25年間公認会計士として仕事をしてまいりました。現在は、東北大学教授として会計教育に携わっており、学部生・大学院生に会計・監査を教えております。僭越ながら貴重な誌面を拝借して、これまでの経験とソフィアンとの関わりについてお話いたします。

1. 学生時代の思い出

私は、大学2年生までは、会計士の勉強はしておらず、普通に授業を受ける毎日でした。当時在籍していた国際交流のサークルを通じて、フィリピンに行く機会がありました。初めての海外だったこともあり、現地の大学生との交流を通じて、多くの刺激を受けました。マニラでは、スモーキーマウンテンという巨大なゴミ捨て場のスラム街を視察したのですが、危険な環境の中、売れそうなものを拾って必死に生計を立てている子供たちを見て、自分も何らかの形で社会に貢献できないかと思いました。これをきっかけに、途上国支援に興味を持ち、他学部の授業にも出入りするようになりました。特に思い出深かったのは、現・総合グローバル学部の寺田勇文先生のフィリピン語の授業でした。参加者が少人数だったおかげで、「めぐこ」というアジアの子供たちを支援するサークルや、海外で井戸掘りのボランティアをしている友人と出会うことができました。彼らとはいまでも年に一度は会って旧交を温めています。

2. 経鷲会と西澤茂教授とのご縁

公認会計士になってからは、しばらく四ツ谷に来る機会が無かったのですが、10年ほど前に、上智卒のOBの方に誘われて、「ネオソフィアン」という若手の卒業生の交流会に参加する機会がありました。その場にいらっしゃったのが、経鷲会の現会長の田村隆さんでした。ちょうど経鷲会の

会計係を探しているということで、以来お手伝いさせていただいています。経鶯会には、会計士の先輩方が多く参画されていて、仕事上でもサポートしていただき、とても心強く感じています。

また、昨年までの3年間、経済学部生向けの講義を担当しました。所属の監査法人からの寄付講座で、私が講師兼コーディネーターとなりました。その時にご指導いただいたのが西澤茂教授です。西澤先生は、監査法人とゼミ生との交流にご尽力いただき、会計士を目指す学生を応援されています。この寄付講座では、企業のディスクロージャーをテーマに、一般企業の役員やIRに携わる実務家をゲストにお招きして、学生に興味を持ってもらえるようなプログラムにしました。直接経営者と触れ合う機会が少ない学生には、良い刺激になったのではないでしょうか。新たな試みでしたが、西澤先生には温かく見守っていただき、心から感謝しています。

3. 四ツ谷から仙台へ

私は昨年監査法人を退職したのですが、ご縁があり東北大学で教鞭を執ることになりました。ようやく1年間の講義が終わり、一息ついたところです。上智大学で3年間講義をした経験があったおかげで、大きな不安もなく楽しく授業ができました。監査法人時代から会計教育という分野に携わってきましたが、経理・会計を志す後進を育成する役割を担うことができ、望外の喜びと感じています。仙台通いもすっかり慣れてきて、地元の居酒屋巡りをする余裕ができてきました。

4. 会計からアートへ

私は東京・馬喰町で個人の会計事務所を開いていますが、趣味が高じて写真のギャラリーを併設しています。意外にも上智大学出身で活躍している写真家は結構いらっしゃいます。木村伊兵衛賞を受賞した都築響一さん、フォトジャーナリストの安田菜津紀さん、また経済学部卒の新進写真家Goto Akiさんは風景写真の新たな世界を切り開いています。法学部卒の写真家・音楽家の安達ロベルトさんとは、学生の時に「めぐこ」のチャリティーコンサートで演奏されていたと知り、25年ぶりの再会を果たしました。このご縁で、安達さんには、2月20日から私のギャラリーで写真展をしていただきます。専門とする会計分野だけでなく、アートの分野でもソフィアンが活躍していて、本当に嬉しく思います。

上智大学を卒業してから25年間、ソフィアンの先輩・後輩に恵まれ、多くのご縁をいただいてきました。今後も「隠れソフィアン」との新たな出会いが生まれることを楽しみにしています。

AIがもたらす未来

本谷隆光（1994年 経・営）

皆さんこんにちは。グランドデザイン株式会社を経営している本谷と申します。当社は主にSIerや大企業向けのシステム開発を行っており、私自身も経営者としてだけではなく、プログラムを書くエンジニアとしても仕事をしております。今回、寄稿の機会をいただいたので、何かと今話題のAIやその周辺技術について、少し書かせていただきます。

まずお伝えしたいのは、メディアの報道には踊らされないで欲しいということです。「AIの台頭でなくなる職種十選！」などという記事には過剰反応しなくて構いません。そもそもこの手の記事を書いている記者がAIのプログラムやシステムを開発していることはあり得ませんので、技術的な裏付けがかなり欠如しています。ただし、だからといって今のご自身の仕事は安泰だと考えるのは間違っています。

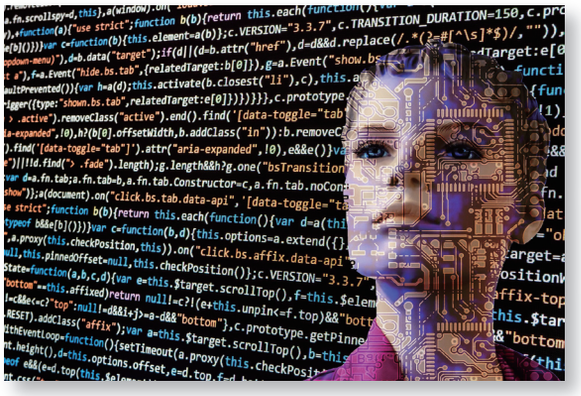
ざっくり言うと「データ化しやすいものを扱う仕事は人間以外（AIなど）に置き換えやすい」ということになります。これは数字だったり、形式の決まったテキストなど、定型化しやすい情報を指します。これらは既存のRDBMS（リレーショナルデータベースマネジメントシステム）でも扱えますが、近年は技術の進歩が目覚ましく、より

膨大な量の情報（ビッグデータ）や、完全に定型化されていない情報もコンピューターが学習して扱えるようになってきており（機械学習、ディープラーニング等）、これが人の手に取って代わろうとしているわけです。

つまり、今までは人の経験や勘というものに頼っていたものが、プログラムやシステムに置き換わって行くことになります。例えば、販売員という仕事。正直これは AI にいつか取って代わられるでしょう。接客をし、お客様を見て、その人に合った商品を提案する。もちろん立派な仕事ですが、そもそも本当にユーザーが望む商品を完璧に提案できるものなのでしょうか？過去の購入履歴、そのお客様の趣向はもちろん、商品在庫も全て頭に入っていなくてはなりません。販売員の忙しさや体調、気分に左右されることだってあります。つまりこれは人間よりもプログラムやシステムの方が処理を得意とする分野です。

皆さんも必ず使ったことがあるであろう Amazon の購入サイト。そこには AI のレコメンド機能が実装されています。当初は的外れなこともありましたが、使用するにつれレコメンド精度は上がり、より欲しい商品の提案に自動的に近づいていきます。今まで販売員が行っていたクロスセルやアップセルも全てが自動。在庫量も正確で、決済も一瞬。Amazon は開発費を膨大に掛けられるとはいえ、システムが軌道に乗れば、あとはプログラムの修正といった運用で済みます。何より社会保険費も必要な多くの人員を実際に雇うより、はるかに安上がりです。さらにこの仕組み自体を外部に商品として売ることも可能なのです。

こういった技術の進歩により、いつか街の風景も様変わりすることになるでしょう。店頭には物品のディスプレイはなく、大きな液晶モニタが設置され、商品の PR だけでなく前を通るお客様に合わせたセール情報などの最適な広告を AI が判別して流す。店内にはタブレットがあり、端末がお客様情報を取得すれば、購入履歴やレコメンド商品、在庫が表示される。例えば衣料品を扱う店舗の場合、お客様の全身画像も登録すれば、タブレット上で試着のイメージを確認したり、カラー



コーディネートもできる。もちろん購入と決済もすぐに完了します。サイズが変わった場合は、センサーで再度採寸し、太ってしまっていたら、その方に合ったスポーツジムやヘルシーな食事を提供するレストランがレコメンドされるというのも面白そうです。在庫は倉庫に置き、システムで一元管理すれば、効率的なうえに店舗の面積を小さくできます。もちろん配置する人員も少なくて良い。経費削減に加え、上記のようなレコメンドを通じた異業種との接点や、新たな広告媒体を生み出すことにもつながっていきます。

既存のビジネスが人以外のものに置き換わって行く未来。ただ、冒頭で書いたように、メディアに踊らされることなく、むしろこの変化をポジティブに捉えて欲しいと私は思っています。この国は、残念ながら今後経済が急激に上向くことはないでしょう。何より人口が減少しており、出生率が大きく改善する可能性もありません。しかし、だからこそ、人以外のリソースが発展・活躍する社会になるべきだと私は考えています。

AI や機械の方がより効率的に処理できるものは、どんどんそれらに任せるべきです。そして本当に人の智慧が必要な分野に人間を配置する。その方がより良い未来が拓けると信じています。それこそが真の効率化であり、「本当に人が行うべきことは何か？」を問い直す絶好の機会になります。さらに「人の価値とは何か？」という哲学的な命題に進むこともあるでしょう。テクノロジーは進化のスピードを増しています。激動の時代だからこそ、是非皆さんもご自身の答えを見つけていただけたらと思います。

経鷲会ゴルフコンペ

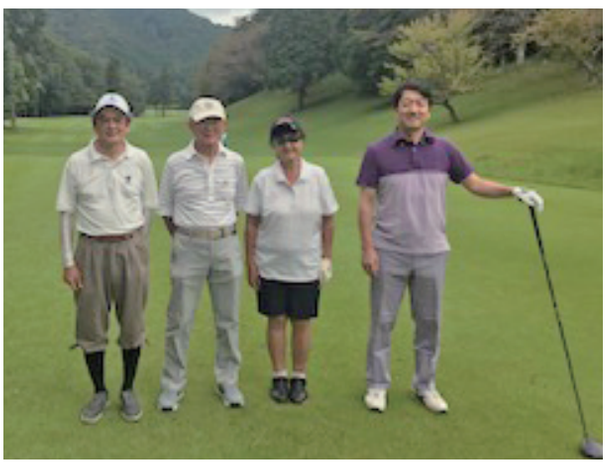
槇原尚樹（1970年 経・経）

恒例の経鷲会ゴルフコンペが2018年9月23日（日）栃木県佐野市の唐沢ゴルフ倶楽部三好コースで11名が参加して行われました。

同倶楽部は、足利・佐野・栃木ソフィア会会長の吉澤慎太郎氏が理事長を務める風光明媚な山々に囲まれ広大な用地に18ホールがゆったりとレイアウトされたコース。フラットで広いフェアウェイに豪快なショットをと挑戦意欲を掻き立てられ挑んだもののコースの罠に嵌って悪戦苦闘したのは私だけではなかったようです。

競技は新ペリア方式で行われ、優勝したのは小川晋一さん、準優勝は地元の利を生かした吉澤慎太郎さん。因みにベスグロは89ストロークで回った田村隆さんでした。

左から 百井さん、佐々木さん、松本さん



左から 田村さん、小川さん、川田さん、植村さん

ラウンド終了後は、相変わらず面倒見の良い田村さんの進行で表彰式と懇親会が取執り行われ、倶楽部の料理に舌ずつ身を打ちながらラウンドの反省や大学の話題で話が弾みました。

今回、私と同じ組で回っていただいた小森始さんは現役時代同じ製薬業界でご指導いただいた大先輩。戸川清さんと吉澤さんとはソフィア会活動で今でもご一緒する仲ですが、ゴルフでご一緒するのは初めてでしたのでお互いの親密度が一気に増しました。

他の組みで回られた百井俊次さんと川田リカさんはソフィア会常任委員として、松本正一郎さんは同監事としてご活躍中。また、ゴルフ大好きな佐々木芳邦さんは、在日中国人ビジネスマンとの交流促進をライフワークのように熱心に取り組んでおられます。また、IT（情報技術）業界で活躍されている植村保彦さんには何時かゆっくりお話をお聞きしたいと思いました。

ゴルフは人と人とのコミュニケーションを一気に深めるスポーツでもあります。経鷲会やソフィア会活動を一層活発にするためにこれからも経鷲会ゴルフコンペを大いに盛り上げたいものです。次回ゴルフコンペへの大勢の皆さんのご参加をお勧めします。

左から 小森さん、吉澤さん、槇原さん、戸川さん

－年会費納入のお願い－

同封の「払込票」にて年会費3,000円の払込をお願い致します。あわせて、寄付金によるご支援・ご協力をお願い申し上げます。

経鷲会だより

研究奨励金の授与式

2018 年 12 月 13 日、経済学部会議室 A にて経鷲会研究奨励金と経済学部・経鷲会奨励金の授与式が行われました。後者は、経済学部の学生のご父兄の寄付をもとに個人及びグループの活動で功績があったものに送られます。

経鷲会は、研究奨励金 10 万円を成績 1 番から 5 番までの 3 年生に毎年送っております。対象者は正式に経済学部が選んだ学生及びグループですので、履歴書にも書ける、公式なものであります。これも皆様のご協力のおかげです。学生、経済学部、ソフィア会、上智大学からも大変感謝されており、ソフィア会でも経鷲会は同窓会のお手本とされております。

今年は、留学生として初めて中国人の王蒔伊（Wang Shiyi）さんが選ばれました。来日 3 年目の 3 年生、竹内ゼミで「保険業界の規制緩和が保険会社の売上に与える影響」について研究されているそうです。完璧な日本語を話され、素晴らしい日本語を書かれます。日本語を話す外国人は数多く見てきましたが、彼女ほどきれいな日本語を話す人はいない。正直、びっくりしました。日中の懸け橋になってくれることをお願いしました。経鷲会による留学生への応援は、随分以前から三木、上原両経鷲会名誉顧問と小國さんが開催しているワインの会を通しても行われてきました。

この3月22日に行われたソフィア会国際委員会主催の卒業留学生の会には、ロシア人の Alexandra Nekhzer さん、李メイさんが出席してくださり、もうすぐ経鷲会会員になるのだから、しっかり働いて経鷲会を応援してくれるようにお願いしました。

3 月 25 日の学位授与式には、青木学部長のご厚意で経鷲会の宣伝を経済学科と経営学科の経鷲会の新人たちに 30 周年を迎えている経鷲会の活動内容等を中心に説明してまいりました。

（田村　隆）

経鷲会ミニ企画

佐野市立吉澤記念美術館見学ツアー　―――さざれ石について―――

みなさまは「さざれ石」をご覧になったことはありますか。
君が代で歌われている　あの「さざれ石」です。

平成 31 年 3 月 17 日（日）、好天に恵まれた中、佐野市立吉澤記念美術館を訪問しました。ここは、経鷲会会員の吉澤慎太郎さん（72 経済）が設立、運営に貢献されている美術館です。今回のミニ企画では全般の案内役をしていただきました。

東武佐野線の終点、葛生（くずう）駅に到着した我々は、山沿いの出流（いずる）の手打ち蕎麦屋に向かいました。その途中、出流山満願寺を参拝。ここは賭け事と芸事に御利益があるそうで、昭和中期の歌舞伎役者が参拝に訪れた証である講（グループ）の石碑が残っています。

荘厳な本殿にお参りした後、近くの蕎麦屋で手打ち蕎麦を賞味。ミネラルの多い、水のよい所にはおいしい蕎麦があると、吉澤さんが力説されていました。

いよいよ、今回のメインである美術館に入場。旧家の吉澤家は代々、石灰岩採掘を生業とされていて、父上が収集した書画骨董の散逸を防ぐために設立を思い立ったそうです。先日テレビでも取り上げられた伊藤若冲の「菜蟲譜（さいちゅうふ）」の所蔵で、ご存じの方もいらっしゃるでしょう。今回の展示テーマは「吉祥繚乱」。即位・改元を迎え、特別な一年となる新しい年のはじまりを吉祥尽くしで祝う展覧会だそうです。充実した展示品と共に、この日は館内で弦楽ミニコンサートが開催され、生のバイオリンとビオラの温かな響きを堪能できたのは幸運でした。

その後、隣接の葛生化石館を見学した時、吉澤さんから中庭にある「さざれ石」の説明を受けました。山の巨石は風雨に晒され、川で流されて次第に細かくなるのが普通です。しかし「さざれ石」は、石灰岩の小石が水に溶けたカルシウムで接着されて次第に成長し、大きな石（巌）となったものです。転じて、末永い発展繁栄を願う代名詞として使われているそうです。

君が代の解釈は別にして、元々詠み人知らずのこの和歌がなぜ目出度いのか、よく分かりました。参加者全員、密度の濃い一日を過ごすことができ、満足して帰路につきました。これからも経鷲会は、多岐に渡った企画を立案中です。皆様のご参加をお待ちしています。

（三輪一夫）

これからの予定

○4月20日（土）：第2回柴又帝釈天見学ツアーを開催
集合時刻と場所：午前10時30分京成柴又駅改札口　15時解散予定
帝釈天、寅さん記念館等見学後、昼食。（帝釈天の拝観料、昼食は自己負担）
今回も柴又在住、理工学部卒で帝釈天の檀家のIBM OB鈴木孝さんに案内をお願い致します。
○5月18日（土）：ミニ企画「上方落語を聞く会＋懇親会」を開催
・出　演　桂まん我
・会　場　浅草公会堂和室
・木戸銭　前売2500円　懇親会は希望者のみ別途　（担当：三輪一夫）
○5月26日（日）：オールソフィアンの集い
・好評のパソコン解体体験コーナーも、諸般の事情で今年が最後となります。
会場は昨年と同じくメンストの予定です。（担当：福田順子）
・ワインと料理のマリアージュはSJガーデンにて開催の予定です。（担当：上原隆一）
○6月中旬：学部長、学科長他幹部の先生方との食事会を開催（担当：田村　隆）
○6月～7月：社会人のための歌舞伎鑑賞教室に参加予定（於国立劇場　担当：大武宏至）
○9月：サッカー観戦の夕べを開催予定（於埼玉スタジアム　担当：松本正一郎）
○11月10日（日）：経鶯会定例総会、講演会を開催
（以上お問い合わせは　三輪一夫（dzj03720@nifty.com）にお願いします。）

読者からのメール

お世話になります。会報Economiyanをいつもご送付頂き、有難うございます。
昨秋号で気になる点があり、幹部の方々にメールを送らせて頂きます。
記事：「『41経の会』福田屋見聞録」の料亭の名前ですが、ご投稿された鈴木先輩もうっかりされたと思いますが…
福田屋→福田家　です。
北大路魯山人の意図を引く名料亭。戦前は現ホテル・ニューオータニの地に住まいしていた海軍総帥伏見宮様が贔屓にしていたとか。戦後、政界の集会に始終名が出ていました。狭い通りに黒塗りの乗用車が列を成していましたね。
というわけで何処かで訂正をお願いしたいと思料致します。
よろしくお願い致します。

秋葉　哲　（1967　経・経）

エコノミアン編集雑記

『ソフィアの鶯 その②』

まずは、編集者からのお詫びです。先の第55号の鈴木毅さま（1966年経経）のご寄稿文タイトル「「41経の会」福田屋見聞録」並びに本文中の「福田屋」が、本来、『福田家』と表示すべきところを誤って掲載してしまいました。謹んでお詫び申し上げます。

去る3月5日に、上智大学とフィリピンのアテネオ デ マニラ大学との交流50周年記念式典が大学主催で行われました。編集担当の私も2年後には金祝を迎える年になりますが、当時の2期生として約1ヶ月の短期留学に参加しました。もう50年も前のことです。

当時の指導教授の勧めで東南アジアの学生との交流と彼らの生活の見聞を目的に出かけた結果、いろいろな問題意識が生まれ、その後の私の公私にわたる人生にも大きな影響を与えられました。今般来日したアテネオ大学卒業生の中には50年ぶりに会う人々もいて、大いに旧交を暖めることができました。

あれから世の中の技術は「ムーアの法則」に沿って進化し、利便性が格段に向上しましたが、これから未来に向けて世の中はさらに指数関数的に技術進歩が加速してゆくと考えられます。AIが人間の能力を超えるとも言われますが、長年にわたる友情だけはAIにとって代わることができないと信じています。

戸川　清（1971年 経・経）